バヌアツの「居酒屋」事情　　白鳥貞夫 （2004-06 バヌアツ 経営管理）

コロナ禍で居酒屋が経営の危機に立たされている。居酒屋がそれほど多いことを改めて認識し、逆に見れば「帰りに仲間で一杯」がそれほど盛んだったとも言える。「酒」が仲間づきあいの潤滑油に使われるのは日本だけでなく、イスラム圏以外では共通の風習と言えるかもしれない。

「帰りに仲間で一杯」が「酒」でない国がある。小生が 04 年～06 年に SV を務めたバヌアツ共和国である。バヌアツ人はいかつい体躯と面構えだが、酒が一滴も飲めない。宗教上のタブーではなく、アルコール分解酵素が無いらしい。試しに相棒にビールを飲ませたことがあるが、一口だけで息も絶え絶えになり、翌日欠勤した。

バヌアツにも仲間と一緒に飲んで酩酊するための飲料がある。「カバ」だ。胡椒科の植物の根を石で擂り潰し、泥水状の液体を布で漉したもので、ヤシ殻の椀で飲む。この世にこれ以上不味い飲み物はないと言っても過言でなく、一気飲みして直ちに口直しに果物ジュースで口を漱ぐが、歯科医で麻酔されたように口内が痺れる。じっと我慢すると10分ほどで脳ミソが揺らぎ始めるが、愉快になって高声放歌が始まることはない。カバの酩酊は強い沈静作用で、ヨーロッパでは鎮静剤として投与される。そんなカバを1杯 100 円で供するカバ・バーの暗闇で、首を垂れてボソボソ話すだけである。（バヌアツは首都でも電気が点くところは限られる）。カバに弱い我々はハラをこわし、カバ酔いは翌々日まで残るが、職場の付き合いとあれば、誘われたら3度に1度は断れない。

そんなバヌアツにも「地ビール」がある。バヌアツ人用ではなく、首都ポートビラの白人コミュニティ向けに1日に小瓶 400 本を生産していた。小生も愛飲したが、飲む度に味が違い、酔う時と酔わない時があり、浮遊物が漂っていることもあった。ある日店頭から姿を消し、デンマークで醸造を習得した白人オーナーが投げ出したと噂された。2ヵ月ほどで地ビールが店頭に戻った。オーストラリア人が工場を買い取って設備を一新したという。ラベルの意匠は前と同じだが、「品質第一」の文字が追加され、確かに味も酔い具合も毎日同じになり、浮遊物もなくなった。

バヌアツは南太平洋に浮かぶ人口２１万の最貧国である。小生の SV ミッションは商工会所でバヌアツ人向けのビジネス研修を立ち上げることだったが、ビジネスと呼べるものは全て白人と中国・ベトナム系移民が仕切っていた。バヌアツ人の８割は自給自足の村人で、残りの都市生活者も公務員かその日暮らしの人たちばかりで、ビジネス研修とは縁遠い。悩んだ末に中学の「職業」の授業を思い出し、商売のイロハから説き起こす教科書を作って講座を始めると、高卒女子（バヌアツではエリート）の事務員希望者が集まるようになり、２年目に思い切って「ISO9001 講座」を開くと、役所と外資会社の管理職クラスが来て、やっと水脈を掘り当てた気分になった。

任期の終わり近くなって、バヌアツに移住したばかりのオーストラリア人のメーカーOBが講師を引き継いてくれた。その友人が地ビールの新オーナーで、ISO9001 の認証を受けたので講座で工場見学に来ないかという。勿論 OK で小生も同行した。輸入したペレット状の「ビールの元」を水に溶かし、タンクで寝かすとビールになり、濾過して瓶に詰める。タンクの温度管理と衛生管理がバヌアツ唯一の ISO9001 認証の中味だったが、見学者がバヌアツ人では試飲ナシもやむを得ない。

1964 年まで食人の風習があったバヌアツの珍しい風物や、日本の昔話そっくりのバヌアツ民話集、ガダルカナル戦の米軍基地だったバヌアツの実話集など、ホームページ「写真で世界を巡る」 https://withcamera.jp 内の「バヌアツ通信」でお楽しみください。

完

KAVA
Bar